賀茂社記録

十三

832
97
305

13

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

競馬秘記

832
97
305

13

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

競馬可乗次第

一三遅之根三競所望

一 当そあきくものやうに乃るべき競

一 婦さ法さも忍れやう

一 ゐるに分すはいしをしゐるゐことし

各三乃競あるといへども当そ何きこもの

競目出度ハ面仲ハ申て云三遅ハ馬乃心残

家見当ゑなる一遅ハ三丈によすへし

二遅ハ二丈にかゝきれ残ちにのるわりて

大正 7. 2. 2 購求

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

面銭あたへし馬のうち葉尾のかたはも
能くなら姉へし三遅つ丈乃内に定り候
あゆゑ乃ち風銭阿はすべし此三遅乃ゆゑ
一遅ハ走。く。いかゝあると二遅ゆゑうちゆゑの
（虫損）（馬）
らちに付こうん。銭志こん走め。三遅り
（ん心）（なり）（異本ニ又已下朱点ノ分）
阿ゆゑ銭すこひるんに走く家いかゝと心ゑも
身死也此走ひ乃ハ早やうハ一生に馬ハ志
早銭あらすべし是も精こにあるを心ゑん
こめ也

一二とを恵乃三遅乃精まろに此るへきにも
持れも一遅より沢東にちゝくよりあゆへ
しし春へ家心ゆゑたなし心明るへし且
（似イ）
此説をハ下野乃武此しむする手明里
（信）（斗イ）（虫損）
もまたし此手もち井ける車乃輪
（んイ）
のことしとて此精銭ハ中なり
（んイ）
一右乃葉尾のうちおて鞭銭とるやうにみに
むきてとり左此葉尾乃出る時向合へし
是可普通乃精一番なん結らんときハ

此完なるへし一の競にハ川〻三銭馬に
みをて中へ阿よハうしいまして右此案
尻乃出る程家埒に生て出へし津〻三
乃程に出てすさしし　るその中へおし
て鞭越とるへし右乃案尻之程に清三
ちかくそよしまし

一　埒乃多ゆ法左三人右三人三手廣三丈三尺
出程ハ馬さくら越くハつゝる完なる事右
左此馬場法金剛院乃馬場此完な

梨埒のなるさ取によるへしよの川ね乃
廣さ三丈也右左法金剛院此をまて
ハくらへ馬乃程阿里　三程ハ下手に海う
くへうらひ右此案尻当りといふとも（ん）る
此さのむていまもて明しく上手乃埒に
（ちやくい）（ひや）　（虫損）　くへし　其乃ゆへハ下手ハ（へ）
法くりへ（うけ）入らるる事乃あるに里さ家お
いいるハわ（る）きせうふ也さくに里に志里の
阿し入ぬ程ねよきゆうふなるといふ也

いたくまてをたくり此あらんところハ同意
すへし
一 埒乃ふちハ左ハ一姫ちたれ二ふちといふ也
一 埒をん乃ひろさ二尺左乃羅ち此乙殿前ま
何くへし
一 左の羅ちハ上のくゝ銭ゝしゝく結へし二
丈(尺イ)志るむへし右ハすゑを二丈(尺イ)乃ふへきゝ也
ゆいちゝ姫へきゝ也
一 むなを藤孔事二匹ゝそ此れゝなるゝ

何るへし一度ハ馬銭川よくうちてみよ也
一度ハよハくうちてをすへし此事此事
よい川迷ゝ早をし敷とんむへし かくれ
いをきゝ堂れとも(ルイ)堂ひくをすれハをこ
海しきをもあ孔ハ一度ゝそこゝろむへし
一 埒何くる時左ハ遠らちまゝへてあをく
此前乃堂つゝ此柱まむへく をさへ高ふ
ち銭高ま志らをひして やをら(虫損イ 無イ)とるへ
右をわらちま楚へ高いくつして海前ち

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

かくなるてすこし馬ハ中へ何よそかし
おして辰己乃たしらふむをて左乃完
ま嘉ちハとるへし
一今一疏ま右乃乗尻まあらんときうち入事
をくまてあよハかしおして姉ち銭とれと
いふ疏何ま兼仲か相語也秘蔵すへし
一むれを稱してうち何をてをくへいして
まへまこらくまうそきまや宝らく相も
子細をあらん又をくまの何る乗尻もひらかれ

ぬるハわろさゝるもさ社ハうち何くるをし
き銭みを何いをかし出して宝らるまし
きやかくをいへともを代ハをうくうち何者
て前まてひらくめるを法連とん何をて乃
るへしふるくもちかくもろこ銭宝らき
ておかくをかれ堂り能々ひらまことハ
用意すへし
一ほこ乃らち此長ハ二疏あるけ〻みの相て
よるをこのまへまて廿四丈か又いたく廿四

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

丈といふ説阿里

一 葉尾乃法ゝ三銭中やう左の葉尾ハつゝこよ
むかへく鞭銭かえ(ヘイ)して中やう阿里又ふち
銭法かきすよ上里て中やうをあり右乃
葉尾右中相ゑ法ゝこよ里 法ゝ里て
志やうこれ石とまてうちよ勢て中なり勢
れもいまくなてらちまよりまし 但い
法連乃かゝまてをせう姉をうゝんと忘(ふイ)
のまし里ならハいまく一事のかしら云ら

めすして中あへし これよ里ゑくをハひすへし(ヨ下朱点ノ分イ本ニなし)

嘉欽
壽祿二年二月廿五日 前筑後守高階朝臣(仲國)判(在)

一 かちまゝ里れやう左乃一番ゑ葉尾法前まて
鞭銭法(イ法)まへし 但ゑ銭も葉尾よよ勢へし
三をゝりれか云ねちまといふ事阿里ひさ
う乃こと也 兼弘顕長 惟方 此外の人傳ゝ

法るれ右の乗尻ハさう御くわゝるへからぬ事
ゝ事ゝこれと仰せ候ふ事ゝ事ゝるへしお
とゝの事すきてゝあちをいゝすへし
一法馬(イ云)ハ乃里てゝうち御くる様たいち机(たん)法
所乃辰巳のたしらゝあゝる程より里清る
銭むかへしさてゝうち銭むきてお入法
ゝまゝ下手ゝむかひてゝうち入へし　是を
さ里事御きゝやうまゝて一るのの里を右持ゝ
めなす里右乃乗尻を同事なる里

一えらへ馬乃法(法歌)といふハ別れるまゝあるのよ
ゝるといふとゝ事件のよゝるゝ乃手ハ雑
ちの中ゝ二更持れよかゝ手乃るのゝし
らよ里してゝ家るたのよ二更銭たゝらひ
あてゝえゝすへし　是をハと(外)乃よほうと
いゝや馬乃長九尺なる里かゝきのむすの
ゝるよ里我るのをとまて二更
一尺の出れるとまゝすうきゝ法(ら歌)むハあやま
ちすへゝうゝれ

(うゝさんよハイ)

一うちはよわうれかうき乃ゐる此尾本よりも家馬
はかれのもとへ中三更よりすゐるやされ
ハ所をひ（虫損）更二尺ましよすへし堂てしよ後
やうハ能く用意事へしさはりの事と
思ハよすへしをとりて乃馬ならハ
志乃て（な）いむへし（忌）一事のうし雑をひねハ云ら
むへし（此事のらんと思ハ凡此よわう秘蔵の事イニ）なりこ乃やう我志ら努業尾此
遠をたいをもし又をとても努うすなり
此法不心得うゐめてん業尾ハゆふかひ得き

せうふハすへうゐひねようちおして後よハ
此つ不をんよかきてすゐるかうきれ事乃
まへの所し我みあをれ無しかまへ家家
馬此かれふらもそ堂ひなこ（イ）すへしか
うきれ馬乃すへのあし（イ云）こうれハをうへし
かうれかれをみるといふをちあれとも堂うく
みあをうるハすこし志やうねなきよ所
まと兼仲きかくいふとて所しをうり我
まかるハあしきるもおひかれといふ事ハ

上手をいて手拍なるときくハうれをみ
留へし　我かれをハかるくすへからし
一　馬乃くろまる銭せうふといふハやうまよ候
こゝ忍るのくろまるハあるときくさ数なり
それハ数うふなるにくろをさる銭にうら
あるやをるれ見るまるハ世銭当ためて
まるなる　其こたさうの数う姫也をら
かなりとも近へし
一　馬乃首銭常ハひらむへしちゑれとも

ひらこぬれハえ拍ハすろこ銭拍へこもる
なる又ちうやうより阿ハてさ数也
一　をとりて乃るまる乃まこらんまハ儲へし
こゝ儲様ハ常まつをしまつねハいこうれ
高くこゝ候へし　又をくよるよすへき候ら
ハなるたくなるをハすらにかゝき乃さひ
ちふ阿高きう姫あべし　大乃ふれも
しぬをすハとりてち銭をんとふふ也経
方かくハ中希里

一 姉るく申はゝへゝる説なれとん(もん)等の所
すくれらハ老くとも(ん)抱へとハ中勢とも(ん)抱
れ也まん(む)ゐるよゝるへし又馬のあしは
抱(陸)へし只すんゐられ程銭ゐは是ではなら
姉べし万祇ハあやまちすべからず常と
へ是れらひて是ハきゝ又とる事とる(と)抱
いてくとも(ん)一事ハおゐ万きまてハ書へかれ
一 馬乃埒の中まて走すハ(ら)んする銭うゝて
(イ)けよくち(ち)を法きしこゝ常へかられ是故ハ

さやうに抱られぬ祇ハ万こりて勝負乃
時にやうなる也かくそいへどもたしゝ所
こゝ程にらん抱ハ何にて志てむへしよ
き程にうさ(うさ)まて計へし
一 かゝくちさいたらん万銭ハこゝきゝ銭か
常きにむきて案屋し
一 志里すすひしていてぬゝとハくれ是れ
水つきれ輪金のもとに姉ちれ法き銭入
高法よくけしお勢ハ口をとりていゝ

すと馬ぬていひつる事

本

一 くらへ馬れやうく乃ての次第

一 からや（うイ）半へひけうれ、となる事

一 ハゆんしまれ法ほれ手とハいへとも（んイ）上まで

とも（んイ）乃事いふする事まへくくらへるのなら

ひ（いイ）れいこしく上まで一人乃きとも（んイ）まつ（く）

何以しらへれ上手をかひなし

一 手をし二説あ事たれちもし右乃手もし

是イ

○横乃勢ち何事一話惟方今乃手もし

一 何事此れ件入座の案お半るてやうつら

めよよもて案へし秘蔵く

一 かくしまち三とよすきてハ案へかれ

ろれすきハとろ免何るへし兼仲ゟ物

語よいたく件の手れたくよ事る銭の事

うかめてをのく馬銭とくろもし事ハ

云らめてよ銭てもしやとみるそ也新

日吉まて粮久兼直まる事あひてり（んん）時（こイ）

れかくし物ちを云とよすきて頼久の
里てらしを兼直とらめゆひきめてこく
しるしさいしを出るものをと兼
仲かゝるゆゑ
一 多てふちとゆハ多を此中よすくに出て、
うゝろ銭みるを此手ハ敦信このこ案
里出ると傳ゝる
一 けらてと申横あるをもしさらてよ
をきそハ日記よかくとてんこうしるそ

をしうへし
一 丁をし此手ハいろく海しけいそりしに也
志り志ひやうきなる云かへ多まへ銭ま
つへし志のまよりまもしよハ案おなるも
一 まへ乃たるゆゑとゆハすへまて云く銭申也
むらひあるてをくひらきハをくのるに家
多の尾銭くハすをゆをとも件てけふ
れきやんすハいまへし
一 馬銭いうしてのち百手といふ事ゆるそ

れをとるあひこれしこひなるを先とりハ
其き銭を海し才まをいろ者ハなれり
ぬくるやよくゝゆゝんをてを勢なるへ高
うゝ支持さ息をとるへしこれもとるを人（又イ）
まもとるとも我鞍川不銭法よく居て
とるへしかくしとも（ルイ）あこしたるとうハ
志るとうハのよつし銭とるてかゝいゝ
へひ支あくるやうにと就それ高乃走れ
努るくなるまゝ又なをしさうゝうハ

馬の志里銭ふちまて法をゝうハゆゝ里
てをねくたし里のとするなる里
一とる左とされゝ里とん（も欠）いへとも馬をとめつ
れハさをや
一埒より里（外欠）ゆへ是いこされぬ迄ハ法うなき
さをや当て（ノイ）右を乃高場まてわゝくし
ふくへ高ひうまつ里ゆり性方（惟欠）をとすを
兼文伊豫三位乃ふち性方（惟人）海うをてくれ
兼文高埒をまくていけ（ニイ）ゆるにらち銭中に

して性方くひをくて都たる事すして馬場
来すていきて向合なり時の人此て銭さ
ひくりて兼文まゐれしと申なり姫ちを
もあらきゐるまて埒銭おくなり兼文と
里こめくる所中くめゐる他隣屋とは
うしなりされハ雅ちれとくゐるゐいさ就
堂るもやうまゐるへし一寄ちまさ
とすへうしたるらふへきも兼弘物語也
一まへ乃馬れおりて銭たる勢さる里川連ハ法ゐ

札ニ
イ本ニ是ヨリ前ハ中國自筆ニアラス古本損シタルヲ書加ヘタリト見ヘタリ

里ていもとしもこまをと勢ハ大乃右ハ左
もて銭さりはるまみれこゝ里ぬる事
なる里大社ハおく乃ゐるのて乃事なりおり
馬のおりて銭さへれ馬ゆきまゐるゐ変
里ゐるゐちなしハ
一法うをんとおりふなしハわるすこゝ銭川
ねる。経方ゐゆあるハか ちまはれて
こうをよゐ里ハとこゐる勢ゐ奴名い
てくるとゐゆをれ法連と色あるき上

此もときくハゆのうをわたこし分里とも
しこ里このてをいきくいむ相ならハくら
へ馬けうなく都しろきまゆかん（ウイ）
一 たくすまよ勢ハ法々みよおろれてよす
へかしくらへるのとまといふ者たくすて
みく分里兼弘ゟ申きるハ法くられハ（虫損イ）ゆ乃
ちる（虫損）（とろ）うふよすへしかくきゆるのかし
雅所し銭こるへし
一 法々みよおろれてよすへきやうハ川ら

をうまよす屋きなす里又いまゆ記と川
のやうまハ元ひ寄ゆきよよ勢てみ法
寄くふよすれ者法々こゝろこゝろこあられ
ぬ法連とも きん生いを法々みゆ勢う
ふといふことハ生てて記さし保元乃ちろ
すてハ大乃をう姫あまゝ尼くゝる里
一 かまへてゝ当ち銭うちて法々こゝろ川
まても又法きゆちこゝろまをゆゑんを
てをれへしかゝち（虫損）ゆちハうなゝれさすへ

うらは云ずならハ法事へしひすれくハ
さすへうらは
一こうちて乃ち法うなくあきて可いるへうらは
可れ右ハ色のきえうしくみゆるなきの
とうれるへしちと行えん勢う奴よハめきれ
こゝ可いるへきなき楚のゆへそをいてれら
逃てかゝ絶をめ法るゝときみくなしき
其めなき左ハわらちふろひて可い敵へ
右同事なき

一てんどうしそらんときハ云らみて為ちよりきて
為ゆのそうへし法所なきべちろくよ法ゆ
る事何しハかとゝ可たりこんどう銭ハ
寄てゝ麻とのをめして為ぶへし上より
乃だうり銭当可ハれこ就ハ云さう乃事
なき無弘うをのゝ事と楚うを給ハけし
一海うをよきたぬよきといひてをのゝの事
志り此ハ乃むなきろれそわるき事な
事ゝ海うをもたもひきへし云とうこ

銭とりきまして太乃めハ乃れきこゝ阿里て
うゝ支ゝ仁ゝ里
一勢う姉上家といふ者あちれたやく馬銭よく
たするや
一丁上手といふハやうく乃てをならひ（ゐイ）ゝ雑
ともせう姉ハ二（ろイ）れよりハ当て太乃ふゝそ
銭とん（もん）よく乃教へきなる
一ふらへ馬れ当てしゐハこちれらちよもを
は当と。（ゆイ）角すられいうきおりふ仁のよきなる

乃れ仁をねうおへし すへ当ハすらを上里
乃をうへき事まそ阿里云とすちよまうをん
とすれそ分うを所しせう姉を教しと書
るまゝつり
一勢う姉なたんせ不当たなしろく乃らんと
すれそせうく乃すをハくるしうらぬるす
なる兼文をのうゝ里よハかく世中者教
一馬乃埒をこいくるをハ世乃ところよりこゝ
いるへし当てしたつこゝ教る銭うへし

いろれハ何しきことをいふ事く社ハ府なのを
めしてらち銭こしこうこまをもていふなる事
おとのしくみそてよきこ事なる事又かくそ
中勢とも（んイ）事ハ乃まへよりまたりてうち
いふ事何事たとなしくあしうらひみ
ゆる也

一そらへ事ハこうもへ事堂のなをよくと事
へしおれしやうまとまてかこのうへよ云
きちうへくをくへし事ちうち乃てをハ

やとひたる事なりこうまへてをくうまも銭い
堂まへしかこ銭やるうちし其のゆへハ
姫ち堂のれあふこ銭あそせていふす
へしすこし云ちむへしすへて三ち
（イ云）のひ乃なとも勢うふ（いイ）ふうして乃ちも
こもへ川たまあこしおれくみ用へし
一かこきまちられてハ堂ちあふまし多く
し堂。（イの虫損）みてなを社ていくへし其れう通
ハ川よきお（虫損）する也

（イ二大通）法かよ法よくのてまへを云へしやうい
（ろきすへうらひ）

イニ此一条全く有し来の文すこし上ノ条ニつきて見たり

一人銭ならんとて色々ならうゐすべきなるとくらゐなるつよくゐてすべきをとるべし恐
里いかきまへらるゝ

一らんすりなるまてすらくれはむまふ事い
なくれはうるゝはほとくへしまへまて
なしくなとをそせらるへしんよく
はとくれぬ馬ならはおくりは里てなと
くへきなる里当てし經方はほとうけ里
分り替れをときろ里し梨とも兼弘

をたしめとしていたる銭をとるゝ事なる

一馬口うちなりつ里をんは銭はおうへしなるしか
銭をていはし当る物へきなるとくひをな
やしなまてなのらはよきゝ勢うゐなり又
口をこうりをさをていてさまふうゝ銭おう
海しく気銭なやしてこうゝはよきゝ勢う
物なるへし

一三銭乃うち銭勢うふといふるなりむりし
なりなり保延二年九月三日仁和寺後競馬

左重近右武正二地乃当ひ重を進勝ち
うこゝ鳥羽度(に)して公正兼成ゆゑ里ひ
てゆきかり公正二地乃へひ進志れとも
きよ地(くイ)とをうけしてなりひてゆきは
里これハなりゑ(よイ)来ると公卿乃けまさ(ゝイ)ゝ
里をすそのくち当へて云さしよくく
たうゐすへし当てし一番竟馬の乃
里し祭ハ二地のうちよ勢う姫阿里とい
ふとも(んイ)すへかゝけ一番ハ二地の勢うゐハせ

ぬ事ハ里
一海をてくこす乃里し祭ハ馬銭云へ
て(此ノ虫損イ)する事阿里件のてよ左きてハみく
ゐし地(此ノ虫損)うしふこ地し里勢さすゐ事
ハあれくらへ(此ノ虫損)よハなし此兼仲ゆき
一追心あらん目(日イ)よハかゝきれ馬のをくハをて
よけへしいかよいへとも勢うふハいゐくる
なり敦信(近イ)かく地中ゆゑ(一イ本ニ上ケテ一ケ条トス)くらへ馬ハりまへ
て(イ云)ハ二地銭よく乃るへし緒負そけるこ

とまて三地のいよ上をいきことみゆるやた
もしろくちゝぬへし
一上手よあひていうよ歩へしとをたれ(んイ)
のまうらしておれん(えイ)日ハ当てすこしち
うくのらハをうへしまつ(へイ)まてをいぬう
れ当るそいふ為くみくつるしきなまふ
なさうすともかくゆまり
一くらへ馬のあんするよハ三日(虫損)ねていのう
へしかしへて人をもけしねなとまても

まへ銭よこさうすこしう物ハあし
きゝ事なまもしさやうの事ならんと
きそたらへ銭歩へきなまし
一くらへるのたおしきなといふてのなるハあ
たひ云ろうんよハすこていくとおもふ
とをたすへうらひちうくむひまそいうん
よハ云んよ志ろうハをすへしよまく
たうら物へし当てしたきいるのとハ
をしことき云ん当いなんよとりての
るや

一勢う奴お楚くて馬も志ひこの里なや
されの里し里の仏を志つこゝろやうに
たほへハむなれせ銭すへし三とよすな
てむなれ乗ゝすといふ事れ阿祇とも
やうよゝるへきなり
一此馬とり此やうハ此馬を乗なし左右の里
志りねん人をとりて一ち銭いてすなり
イニアケテ
ロ
それを右の里し乗法ろ銭
半ひ右えりてさ
虫損
ゝてし一ち銭法うする

やうなりをまかしてゝうてうし乃あし銭
まへよんへし楚ひたし里をやき
やあふ
ちゝ
ろ
ゐて志ゝうしろへ事この
へくりやき乃あし法ろ里ゝるハたし
里を示しひ月りたら如ひ此当馬ハ
法よくたしれとも
んイ
いてもと如楚しくき
わき云ろきハ半ろ祇をするなり里をやき
法うよハ半ひ仏れ
ひ本まゝ
たりなる一ち祇をやきや
已下朱点分一本ハなし
くれ法ろ里ゝ可馬のうをゝ法ん半なりをや

きけう明星出れハ能く知らうすへし經
方も別記この兼銭ハしろ者里
一をハ心阿里といふとを（ルイ）すへ乃馬の阿し
かろくうゐてそやく食ならんハせうく
此勢う姉あるとみ田とをうへかゝる
一元こもらるり阿し銭もくかこまるて
くらんところハをうへし出るきせう
ふとも又業うしをうゐてくるとこ
ろハうるすこもらや

一くらへ馬ハ月川（一本へし）をてうへきなるこうしろ志
里銭こうハ阿るきまや業（イニ妄）くしきむ（近代）
いそこれうしろこさらハ法留の兼弘敦信
よ事者る日ハ兼則中を敷衣敦信の志
里銭へ勢う姉みゆとゆ少り銭兼弘中
ていそくしをていてうちてハなすきん
ろと申てすへ銭こいてこうもうまをしけ
迷ともきんだいそうしろしを銭い
てうちてひるんと兼仲中きこ

一 くらへるハさまかうこよりこうちいたゝるも
件乃のりしりそけうちよハ馬のうし
雖をハむくへからひハ海ふよしなり家ら
ちよハ志りをすしをていこすへし
一 寄へ高いまくしり銭すかひまし雖ち
よすしをてくこ勢ろれハあやうちを
ぬやうのり
一 川ゆの乃馬をえろ事ハうなるひたし里可
ちりこうよしといふことなしぬし乃高ハ

志乃むやう何里ぬしよ すうすへし
一 いまくたしへこういさくまへからひ名ん所よ
志らとみゆれとも乃里しり何しくみ
ゆるうとも何里わうんよ勢うぬとおそゆう
こころもあらんをハまくゆうすへし 又
ろれ御とのもまきこうへぬ乃里し梨を
いくそうをしへ高もあらん
一 津こ乃勢うふといふことハこうなるひ乃里志
里んてるよすへし川こうちれまん

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

而うこれ知るはうまんをそいうまをんする
楚九尺よすゝる事一丈に成らハつゝこゝに
うたへしされハ沖（ちこうちこ）ゝよをハ出すゝをりて
よすゝるみめハよきなる事
一ハ銭ひらぬきといふて何事をくゝる事み
ゆるてなる事たくれハをうへし
一くらへ馬にとる勢う姫ハこうし有りの
くきうかるやうなれともて銭ゝ事ゝ被て
うちぬるゝすきにくへそ兼守ゝ日記了

此定にかきこゝる事
一説はこの内長をとゞ乃南北つゝのたし
らゝる事廿一丈に当ひへしこれをおもふに
件おとゝ乃たし羅のもとまて三地そち
ゝ姫へきまなる事
一うきゝそてといふる何事件のて銭ハ
八幡馬場まて乃るへし楚乃田へ出而
よる事ゝらんするに当とひなら知るをう
ふなれともみたくへし寿こし法ゝ事

こるまでをみくこれへきなるをれ去
はまへよるまハ里何りとみゆるなり出乃て
ハ云はうすへし
一 敦信も乃てうまいたくまらへるをハ何
まてよをんするまハあれしこ家る乃
志りれあしなさへの馬をくまえなまへ
何し我ハ出むといふとも志りれ何し我
ハたつしてをつへし
イニ此一条アリ
一 いさくるのらち乃内まあそひらんしくらたん時を志たらく馬をたてゝ志つめて三鉈をも
一 敦信就いたくをてとおとろうしといふて
ちうぬのうへしやうてちかへハあしきなり
ちかやるまうくろうと三度たりあ
ろへし 志あくよすれハあしきこと
な梨
保元三年二月十三日殿上闘鶏依左勝同二月廿五日
北野社競馬五番 於右を馬場 被行之
冠褐衣 染分 袴左 蘋芳
右萠黄不著 打懸官人 若常番長 并 近衛
引布常 皷 蔵人左近将監源 親行

鉦鼓六位侍中奉仕
去二月十三日弘徽殿鷄闘賽（賽欤）云々依左勝方人
相集合（令イ）無云々
一番
左 左近衛府生秦兼盛 儲勝 基平二栗毛糟毛
右 右近衛府生下野敦正 鳥羽御厩葱糟毛
二番
左 左近衛府生佐伯重文 内裏 察十麻毛
右 右近衛府生秦兼種 儲勝 丹後河原毛
三番
左 左近衛番長下野敦依 追勝 中宮亮黒栗毛
右 右近衛番長下野公貞 本名 武蔵 御厩栗毛糟毛
公貞引切敦頼褐衣袖
四番
左 左近衛番長秦兼任 追 御厩栗毛駮
右 右近衛秦公景 勝乞技 無纏頭 持イ 御厩黒駮
公景事外近儲左 無尾 恐々儲出技至
馬場末被取落畢然而左取落敵馬
七寸引留公景馬先走了公景勝人即
纏以衣二領兼任依新申經数刻之後
賜一給了
兼任追取々處公景落馬共給隊但落

馬之間被此從者楔出狼藉加之公景綾
碟之由依訴申於大内次兼任賜掩狀遂仗信兼

五番
左 左近衛番長下野敦助 浜路栗毛
右 右近衛秦兼仲 後理大夫栗毛
敦助三遲之間馬越右埒倒落馬了依申障
不被改勝負

同三月廿八日殿上人競馬七番

一番
左 源宰相
右 資賢朝臣

二番
左 信頼卿
右 惟方朝臣 勝

三番
左 隆季朝臣
右 師綱朝臣

四番
左 家明朝臣
右 基家 勝

五番
左 信隆朝臣 勝
右 成親朝臣

国立国会図書館 タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305 ガラス使用

六番　左信頼卿
右惟方朝臣

一　御馬をすゝめらる下野氏の説まつ馬ハ乃中へ
何いたりしいまして引くらをまたたらちへ
をりて引きまた右へ越るへし又左へもをる
へし三度をりて馬をいふ（イニ朱点ノ分ナシ）へし馬いつ
るとまへ法たまふ所して御とのみとま
てなきあるへしかみをみをひかけすへ
しおとのたり（ヒイ）まのみとまてむちをうけへ

件乃ゆちわかめよりまかうへ何くへかるひさそ
志くいまいわゐ　いゝくうけへしかくへく
あちおけきまひらきの右銭ゆい法書
るやうまたもくすへし

一　秦氏す馬やう馬ハ乃中へ何いたりしいふ
てハそのらちふむをそおるへし次右ら
ちまたりゆき又左へをるへし法くけ
らをまた三度をそて中へあいたりしいふす
へしすこしうたそまむをそ馬銭いふ

ひ屋しけ当るをいくして法らをり哉
まれまたをて四度をほ法と三度なりて
ぬちハ下堅うたらひ堅くし三乃ふち哉
秦氏にハほこのかとまてうなるひうてとや
されまたと乃南をしらんを廿つ丈なれハ
哉乃かとをひもるへきまや下堅よりハ三との
堅ひのふちたるくらへきなり
建保二年十一月廿七日左近少將宣親朝臣
てよりひ堅へ早

一説ふちのとりこのめとりこのかとま
ひつ屋し
一説にハくらへ馬乃ふちのやうにとるなり
秦氏にハほらをり哉馬いさぬけきに
四度をりていくして乃ち三度おるへし
下堅にハ当哉いさぬけきに三度たるへ
しとゆなりあちれらちやう二度のこひ
乃ふちにしそうをふちハうひへし
一むかふちといふそかふ支れ馬のをくよりを

よすかまおうとてあちをこゝ川をいふや

一むなた勢といふハ（なノマ）す忽まてたせぬてなり
まへ乃るをたせてす忽すていくをむなた
勢といふなり

一さまた勢といふをつハるのおりふやう
くてすちうふく阿るをた勢なをいてな
里をくの馬乃かゝへむき里らんと純雅
ちよ川あてたすへしこれを大可た
をとハ此ふなり

一あたゐ云乃而うゐまていかんとうろまふ（このぶむ）
く。（ひくイ）まさすへし又すこしかゝ支銭（イ云）ゆみ（虫）
イ本云此一ヶ条ハ仲國ノ自筆ニアラス後人ノ書添ト見ヘタリ
一かも乃めし合をいらの里て
法ほ久すいたんたふたしのをんそ乃（法ん）（ふよし）（イニ西）
里久くよ久こ乃法代いめ山乃けり時（御宇時）
（清茂按系圖教久ー國久号西ノ入道ユイニたうふ神主）
於競馬間秘事者雖一事不殘之
散位賀茂朝臣久胡傳之訖
嘉祿二年二月廿五日前筑後守高階朝臣仲國判

右正本者前太田祢宜正四位下保家縣主
之家藏也。（豊後守保臣家藏写本有之）於競馬尤為大切之記号令
懇望申写就至于子孫不可有御余者也
按久朝者吾神宮之神主資久之二男辻子二郎
久朝也（朝臣ト申ケルハ仲國不勘ナラン）
右京權大夫從四位下賀茂縣主清茂卞

追加
正德六丙申年六月十二日以異本校合相違之處ニ以朱
傍ニ記之了件異本者吾先人刑部權少輔清古書写
之奥書アリ故刑顕之二男善顕家藏也其本奥書云
右岡本肥前守保益家自之本ニテ書写畢則筑後
守仲國自筆本也
寛永八年六月廿三日　從五位下賀茂縣主清古

從五位上賀茂縣主敬顕

朱卞

右武顯縣主藏書也令懇望恩借新写畢

文化三次歳丙寅仲秋初旬

正四位下賀茂縣主直一

右一書自直一縣主令恩借書写

文政三庚辰年仲夏

従四位上行肥前守賀茂經千

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

832
97
305

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第13冊』 請求記号 832-305

ガラス使用